

地域づくりの主役たち 7

地域がつくる中城湾港の歩みとこれから

～泡瀬復興期成会の「みなと」への想いと取り組み～

泡瀬復興期成会

会長 当真 哲雄 氏
事務局長 普久原 朝健 氏

◆聞き手◆ 三宅 光一
(内閣府沖縄総合事務局
那覇港湾・空港整備事務所長)



上空より泡瀬海域、遠方に新港地区を臨む

戦前、沖縄本島東海岸の商取引の主要港として栄えた泡瀬。戦後、米軍に軍用地として接収され、住民が各地に離散したが、泡瀬を戦前以上に再興させようと再び人々が集まり、任意団体「泡瀬復興期成会」が結成された。その希望と情熱が、沖縄唯一の流通加工港湾である中城湾港新港地区の開発、そして東部海浜開発計画（泡瀬マリンシティ計画）へと結びついている。

泡瀬の復興を掲げて

三宅 早速ですが、泡瀬復興期成会発足の経緯や歴史についてお聞かせください。

当真 戦後暫く、泡瀬一帯は米軍の軍用地になっていましたが、部分的に返還・解放が進むようになり、住民がぼつぼつ泡瀬に帰ってくるようになりました。ただ、かつての個人個人の屋敷は全くなく誰の土地であるか分からない。整理して自分たちの土地をきちんとしないと帰れないから、区画整理を行わないといけない。区画整理には資金がいるが補助をもらおうにも国からの補助金の受け皿が無い。そこで対外的な窓口となり区画整理の主体となる組織が必要となり、昭和23年に、有志が集まって泡瀬復興期成会を組織することになったのです。

実際に活動が始まったのは昭和33年頃。何とか元の土地に移動し、郷里を再建、戦前の沖縄中部唯一の商工業地域であった泡瀬の町を再現できないものかと考えた。元の土地は軍用地に接収され、地元住民は、別の地域に分散して住んでいる。当分、



元の泡瀬への移動が駄目なら「内海を埋め立てて、代替地に」と発想を転換し、泡瀬内海の埋め立てが始まったのです。この埋立が復興期成会が発足して取り組んだ大きな事業でした。そうしないと我々は帰るところがなかった。時の米国民政庁官に「埋立をして自分たちはここに移動する」と直訴したのです。

三宅 復興期成会が窓口になって事業を推進、要請、調整をしたのですね。

当真 そのとおりです。発足当初から港を念頭において活動を行いました。浚渫によって土砂を採取すれば、同時に港の開発ができ、町の発展につながると思ったのです。

泡瀬は、内湾性の静かな遠浅の海で天然の良港として古くから物資輸送の中継点及び周辺離島への連絡港として利用され、山原船の入る港町やんばるぶにでしたから、港がいかに大事かという想いは強くもっていました。その想いをずっと持ち続けて今に至っているのです。

三宅 泡瀬にはそうした海に目を向けた開発の歴史があるのですね。ところで復興期成会の組織体制はどうなっているんですか。

普久原 会員は昭和20年以前に泡瀬に居住していたことが条件となっていて、現在6,000名ほどいます。その中で厚生環境、教育文化、広報IT、人材育英などテーマに応じた委員会を設置して、地域づくりのための様々な活動に取り組んでいます。勿論皆さ

んそれぞれの仕事を持ちながら活動しているんですよ。例えば、泡瀬にはチョンダラー（注：京太郎とも書く。沖縄県無形民俗文化財）をはじめとする数多くの文化がありますが、その文化を守り築いていく立場から芸能祭のような祭りも開催しています。

本格的な港の誕生

三宅 昭和56年に中城湾港新港地区の最初の計画が承認されました。復興期成会はこの新港地区の開発にはどのように関わられたのですか。

眞 新港地区は我々の夢でした。昭和50年に沖縄市で中城湾港プロジェクトチームが発足したのをきっかけとして本格的に中城湾港との関わりを持つようになりました。昔は船（山原船）が入っても浅くて泡瀬の島の近くまで遠浅で来られなかった。現在の漁港辺りも遠浅でした。以前は、一本だけ船道があって、満潮の時にそこから大きな船から小さい船に荷物を載せて泡瀬の海岸まで持ってきていました。そして満潮のうちに船は出て行く。沖縄の東海岸で山原船が入るのは泡瀬と与那原だけでしたが、与那原は深いのでそのまま入るが、ここは浅いので無理だったのです。

沖縄市は昭和49年にコザ市と美里村が合併してできた市ですが、当時のコザの革新市長（大山市長）が、「港がなければコザは栄えない、そのためには海岸線を持つ美里村と合併しなければならない」と口癖のように言っていました。合併の条件も港だったのです。

普久原 美里村の最後の村長は、港のことについては「自分は針ほど願ったが棒ほど叶った。こんなに立派な港ができるとは思わなかった」と非常に喜んでいましたね。

泡瀬の原風景と東部海浜開発計画

三宅 そして今、泡瀬地区で海浜を備えた人工島、泡瀬マリンシティ計画（東部海浜開発計画）が進んでいます。

普久原 泡瀬は元々離れ島で満潮になると孤立してしまう場所。泡瀬の人たちにとっての昔からの想い、開発で陸続きになって港が欲しいと先輩方が発展させてきたところ。一方、海に突き出した場所なので台風や高潮などによる被害が多かった。今の石積みの護岸ができる前はアダンを植えて海岸線の護岸整備を行っていました。アダンを植えるのもアプ

シバレーといって、休みの日に各戸から必ず1人参加してアダンを植えた記録が残っています。アプシバレーは泡瀬では共同作業の日でした。アダンを植えて海岸の養生をして海を守り、積極的に自然に関わって町を守っていったのです。



昭和18年頃の泡瀬付近（出典：期成会だより「みち潮」）

ところが復興に夢中になって区画整理事業が終わってみたら、泡瀬マース（注：マース=塩。戦前泡瀬は塩田で栄えていた）を作っていた頃と比べて泡瀬の海が急激に遠いもの感じられるようになってしまった。



昭和60年10月 完成を目前にした泡瀬区画整理事業地域（遠くに見える緑の部分は泡瀬通信施設）（出典：期成会だより「みち潮」）

三宅 東部海浜開発計画は、最初、沖縄市が原案を書きましたね。一方、復興期成会では、計画というか構想当時から色々ご検討され、厳しい注文をつけられたと伺っていますが。

普久原 昭和59年3月に、泡瀬地先の開発についての懇談会を期成会の理事と市長で行ったのが最初と記憶しています。ただ沖縄市から出てきた案は陸続きで埋め立てる案でした。これには随分反発しましたね。

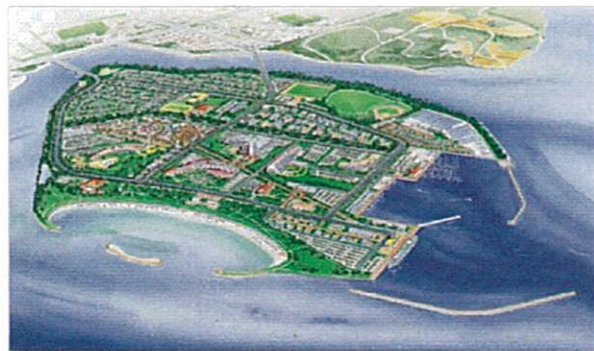
眞 当時、原案で進めようとした市長は復興期成会を甘く見たのです。たかが任意団体の意見を聴く必要ないと発言して相当反発を食った。そうした中で期成会の有志が中心となってビジュアル会（注：ビ

地域づくりの主役たち 7



平成元年頃の計画案（埋立面積240ha）

ユル＝村を守る女の神様）というのが自然発生的にでき、そのビジュアル会が、現海岸線を残すような埋立形状を色々検討した。その結果、埋立面積を縮小するとともに、背後に大きく水面を残した出島方式による埋立を提案し、市当局に強く要請したのです。



現在の計画（埋立面積187ha）

普久原 出島方式で島ができれば、島と陸との間に昔の湿地帯が甦る、今の比屋根湿地や那覇の漫湖のような環境でしょうか、失ってしまったものを取り戻したいという想いが強かった。泡瀬通信地先にはヨネという砂の溜まるどころ（砂州）がありますが、人工島の周囲は砂が溜まるのではないだろうか。そうなればそこに昔のようにアダンを植えて、昔、泡瀬が島だった頃の状況が実現できるのではないかと。



三宅 原風景ですね。

普久原 新しい島ができれば実現できるのではないかと考えています。新港地区の埋立地も背後の陸地との間に水路、この計画よりもっと狭いですが、ありますよね。最初の頃の護岸はコンクリート護岸でしたが、その後できた護岸はとても自然な形で大変いい。

それから、今、内陸からの排水が海を汚しているという状況があります。この事業を契機に、そうした陸からの負荷を軽減していくようなこともどんどんやっていかなければならない。様々な工夫を凝らして、昔あったいい環境が甦る努力をしていきたいと思っています。



新港地区背後の水路（右側为新港地区）

三宅 我々も、環境への影響に十分注意しながら、自然にあるような美しい島にしていこうと色々調査や検討を重ねながら、事業を進めているところです。



新しい島への期待と夢

当真 東部海浜開発計画は、国際交流リゾート拠点、海洋性レクリエーション活動拠点、情報・教育・文化の拠点を掲げていますが、このことは今後の泡瀬地域の発展と大きく関わっています。この大きな期待、夢をどのように実現させていくか、期成会にとっても今後の大きな課題です。この港を中心にアジアそして広く世界との関係も出てくるだろうし、そうしたことは色々な面で地域の発展のために素晴らしいことです。

普久原 それと海水浴場のない沖縄市にとって、新しい島の人工ビーチは大きな魅力です。その他のスポーツ施設とも連携して人が集まる。個人で買える

ような分譲地もあり、新しい土地にいろいろな人が住み着く。例えば現在の海邦町は中城湾港の埋立事業で生まれた町ですが、海邦町が校区の沖縄東中学校は沖縄市の中でも優秀で活発な学校です。これは、海邦町にいろんな所から人々が土地を求めてやってきたから。こういうふうに来る、集まることは地域の発展につながる。人工島は新たな人を呼び込む地域の起爆剤になり、泡瀬地域の将来の発展につながると確信しています。昔は、内海を干拓して生まれた泡瀬三区（現：泡瀬5丁目6丁目）にも若い人が集まって子供を育てたので何をすることも活発な地域だった。今は、子供が独立し離れていったのでお年寄りが多くなっている。海邦町には若い人がたくさん集まっている。人工島はそうした若い人たちが集い、学び、遊び、交流する場所に是非していきたいと思っています。

三宅 やはり若い人は地域の活力になりますね。

菅真 例えば歴史的にも縁のある塩田を復活させ、新しい島に子供たちが来て体験学習ができたり、ミュージアムでその歴史などを学べたらいいですね。

あと何と言っても大きなねらいは地域の環境が良くなること。ゴミや水質の悪化は今や大きな問題です。年に2回ほど海岸の大清掃をしていますが、とにかく陸域からゴミが流れて溜まってくる。今、住民、企業、行政の三者が協働して身近な環境を良くしていくような活動について、色々な経験をされている方に学ぼうと考えています。そして講演会や地域の方々に呼びかけをして勉強会をしようと思っています。

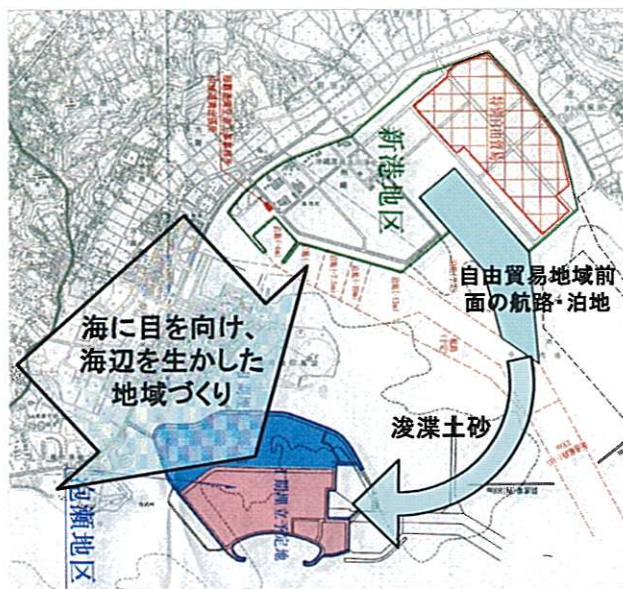
生き物についても同じです。昔は「ティラザー」という貝がバケツ一杯とれたが今は一個も居ない。これは今の工事の影響ではありません。泡瀬の干潟が宣伝されたため多くの人々が訪れるようになって、

獲物よりも人が多いのです。昔は旧の3月3日にしか入らなかった。今は人がたくさん訪れてシャベルで掘り起こして、ひっくり返した石を戻さない。今は毎日誰かがはいている。

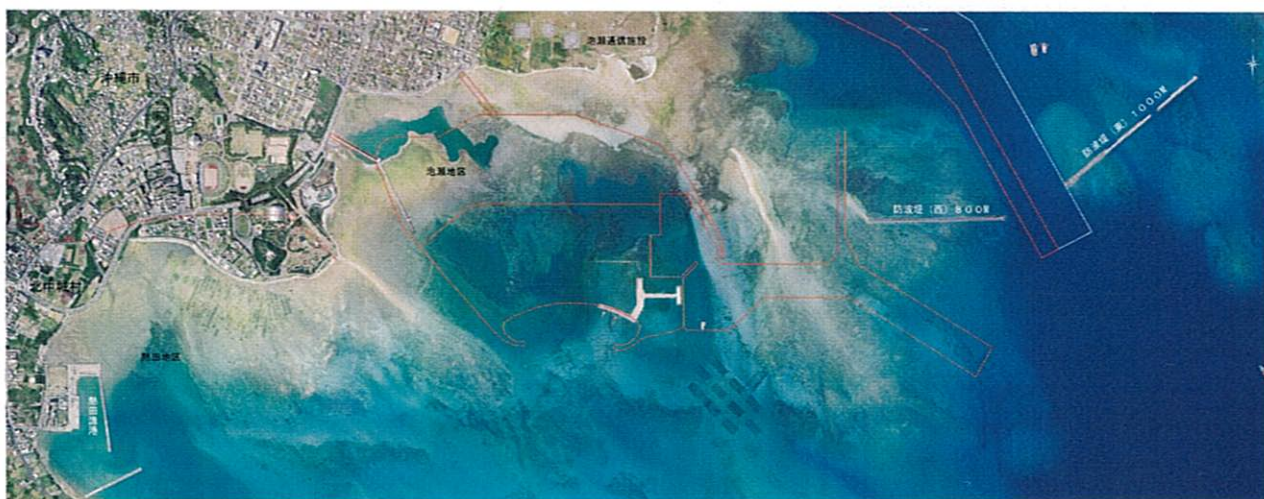
三宅 行政との連携という話が出ましたが。

普久原 期成会には本当に様々な能力を持った人がいるんですよ。それと先ほどお話ししたかつてのビジュル会は、今再び有志が集まり、「プライド泡瀬」と名前を変えてこの東部海浜開発計画の実現、夢の実現に向けて活動を開始しました。行政側ともうまく連携していけば、地域のため色々なことができると思います。

三宅 市、県そして国も地元の方々とパートナーシップを組んで、是非皆さんの地域づくりをお手伝いしていきたいと思っています。本日は有り難うございました。



東部海浜開発計画のコンセプト



平成17年3月泡瀬地区周辺航空写真